

## 飛驒農林事務所の普及活動状況（飛驒版）

平成 31 年 2 月 28 日現在

### 今月の重点活動

#### ■夏秋トマト 飛驒地域夏秋トマトポット耕研修会開催

飛驒地域では試験場で開発されたトマトポット耕栽培が拡大しつつある。今年度、現地実証ほを設けて現地研修等を重ねた結果、新たに4名が栽培するに至り、新規導入者等を対象に施設の準備については場研修を行った。今回は施設導入を進めている飛驒高山高校の先生と生徒も参加し現地を巡回した。

研修会では、施設の設置状況や飛驒版の栽培マニュアルを中山間農業研究所研究員より説明を受け、育苗や肥培管理について研修した。

苗が3月初めに納品されるため、参加者からは「いよいよ始まるがしっかり準備して収量をあげたい」と強い意気込みが聞かれた。

農業普及課では、1ヶ月後に開催する育苗期の研修会で技術確立をすすめる。



【研修会の様子】

### 新たなブランドづくり

#### ■飼料用イネ 畜産農家の需要に応じた品質を目指して

飛驒地域では資源循環型農業を目指して、飼料用イネによるWCS（ホールクロップサイレージ）の生産、供給を行っている。2月13、26日に高山市の3営農組合と30年産の品質分析結果を基に、次年度の需要に応じた品質の生産に向けた個別面談を行った。

当日は農業経営課農業革新支援センター職員から品質面を中心に改善事項等について説明し、農業普及課から栽培管理面を中心に次年度計画について助言を行った。

今後は、栽培管理面における指導に加え、新たな需要の掘り起こし、マッチング等、次年度に向けた各種支援を行っていく。



【個別面談風景】

## ■モモ 協同農業普及事業外部評価会で活動を報告

農業経営課、下呂農林事務所とともに2月18日に今年度第2回目となる協同農業普及事業外部評価会を実施した。当日は普及活動事例として、モモ「飛驒おとめ」のブランド化・産地化に関する取り組みについて、スライドを使用して報告した。評価委員からは、新品種である「飛驒おとめ」の特性や栽培法についての質問があり、高校生とプロジェクトチームを結成して行ってきた販売促進活動に対して高い評価を得ることができた。

農業普及課では、「飛驒おとめ」の普及に向けて栽培指導を継続し、新たな産地ブランドとして定着できるよう努力していく。



【外部評価会の様子】

## ■スナップエンドウ 研修会を開催！

高山市丹生川町では、初夏出荷のスナップエンドウ生産者が年々増加している。特に、トマトの定植前に作付けが可能のため、トマト生産者がエンドウ栽培に取り組む事例が多くなっている。

2月14日にJAひだ丹生川支店で開催されたスナップエンドウ研修会には、作付け予定の生産者約30名が出席し、農業普及課、JA資材担当及び生産者から栽培管理や使用資材等について説明が行われた。

農業普及課からは、摘花の終了時期、防霜及び高温対策、病害虫対策等について技術指導を行った。また、トマトの作付け前にスナップエンドウを栽培している生産者からは、経験に基づき肥培管理等の注意点について説明があった。

農業普及課では、次年度も現地研修会や個別巡回における栽培管理指導を行っていく。



【多収生産者からの講義】

## 多様な担い手づくり

### ■担い手 平成31年度 普及指導計画検討会を開催

飛驒農林事務所農業普及課では、毎年、次年度の普及指導計画を作成し、計画的に普及活動を実施している。今年度は1月末～2月にかけて、担い手、トマト、ほうれんそう、土地利用型、果樹、第三品目と花、鳥獣害の7課題について、飛驒管内の2市1村において、各市村やJAの担当者との検討会を開催した。

検討会では、新規就農者の経営安定のための手法、労力確保のための手段や栽培技術上の課題、新規作物への取り組み内容などについて、熱心に意見交換され、関係機関がタッグを組んで飛驒地域の産地維持・発展のための意識統一が図ることが出来た。

農業普及課では、今後も関係機関との連携を強化しながら、普及指導計画に沿って普及指導を実践していく。



【活発な議論がなされた検討会】

## ■ 認定農業者 経営改善に有利な制度資金の研修会を実施(久々野町認定農業者の会)

2月20日(水)に、高山市で久々野町認定農業者の会主催の地区研修会が開催された。

研修会では農業制度資金について農業普及課から説明を行った。資金で改善が図れる事項を挙げつつ、各資金の紹介や、被災した際に利用できる資金の活用事例の紹介を行い、説明後には活発に質問がされた。

制度資金は認定農業者が経営改善に活用するのに有利なメニューが多くそろっていることから、今後も継続して認定新規就農者や認定農業者等、多様な担い手の経営改善に向けた支援を行う。



【研修会の様子】

## 売れるブランドづくり

### ■ 大豆 大豆の作付品種を検討

飛騨市内で大豆を栽培する生産者により構成される古川町大豆生産組合では、2月7日に大豆検討会議を開催し、が来年度の栽培品種について検討した。農業普及課では奨励品種決定現地調査の結果を報告し、新品種「里のほほえみ」の成績や有望性を解説した。「里のほほえみ」は当日参加していた地元の仲卸業者から生産拡大を依頼されたこともあり、来年度は大幅に作付けを増やし、これまで保留となっていた銘柄申請を行うことが決定された。

農業普及課では、「里のほほえみ」の品種特性等の情報を提供するとともに高品質大豆の生産に向けて指導を継続していく。



【大豆検討会議の様子】

### ■ G A P 県G A P確認制度団体評価に向けた指導

丹生川蔬菜出荷組合トマト部会内で直販を中心に活動する天空の恵み班では県G A P確認制度の団体確認をめざして動き始めている。これまで飛騨地域では4戸の個別生産者が岐阜県G A P確認制度の確認を受けているものの、団体の評価確認はされていない。

次年度の早期に団体確認審査を受けるために農業普及課では運営ルールの策定、自己チェック実施、改善、各種記録様式の整備などの支援を行っている。

取り組む生産者は、今後の販売情勢への対応のみならず、経営管理、労務管理にも役立てようといった意気込みがうかがえた。



【G A P研修会の様子】

## ■ほうれんそう 「若菜会」視察研修

2月4日～5日、飛騨ほうれんそう部会の若手生産者の集まりである「若菜会」の視察研修が行われた。農業普及課では、事前に若菜会役員及びJA担当者と研修内容の検討を進めてきた。研修1日目は関西市場の担当者との意見交換を行った。農業としてのほうれんそうの魅力を訴えながら仲間づくりをし、産地として出荷量200万ケースを目指していくこと等が話し合われた。研修2日目はハウスアーチパイプを製造している工場を視察した。昨年台風による甚大なハウス被害を受けたが、より強く・より軽量なパイプの開発が進んでいることを学んだ。

農業普及課では、今後も若菜会の活動を通じ、若手から産地の活性化を促すような取り組みを支援していく。



【パイプ工場見学の様子】

## 住みよい農村づくり

### ■外国人実習生 ベトナム人実習生飛騨の農業を学ぶ

JAひだと外国人研修生受け入れ協議会は、20期生として23名のベトナム人実習生を受け入れた。

本格的な実習が始まる前の約1ヶ月間、座学で日本の農業や言葉、文化、生活習慣など学ぶ中で、飛騨農林事務所農業普及課では、飛騨の農業について1時間講義を行った。

飛騨地域の気候を生かしたトマトやほうれんそう、また、メロン、果樹、シイタケ等の特産物も含めて栽培施設の状態や栽培方法、販売について講義を行った。

通訳を通しての講義であったが、飛騨の農業について理解を促すことができた。

農業普及課では、今後も外国人実習生の受け入れに対して協力していきたい。



【飛騨の農業について講義】